すばらしき“みえ”

FOR NICE COMMUNICATION

2023.8
235号

■特集／御城印のある、三重の城郭めぐり

●いま、グループネット／木本探検倶楽部　●みえを歩こう／津市 津市中心部

特集

御城印のある、三重の城郭めぐり

九華公園（桑名市吉之丸）

戦国時代から江戸時代にかけて、全国各地で近世城郭が築かれました。武将たちは、本丸・二之丸・三之丸などに郭を区分し、天守（閣）や櫓を設け、周囲に石垣をめぐらせたのです。

三重県内にも多くの城郭が整備されましたが、築城当時の姿をとどめているのは、石垣や櫓などごくわずかです。それでも、築城に携わった武将たちの想いや歴史的背景を知ると、感慨深いものがあります。

最近では、御城印を発行する城が増えてきました。御城印とは登城の記念証のことで、城名を記したシンプルなものから、凝ったイラストやスマホアプリと連動したものまで、種類も多彩になってきています。今回は、三重県内で御城印を発行している6か所をご紹介します。

＊各御城印の販売に関しては、販売場所・販売時間・料金・販売方法などに違いがあり、状況に応じて延期・休止する場合があります。事前に必ずご確認ください。

取材・文…中村 真由美・中村 元美・堀口 裕世・中川 絵美子
撮影……梅川 紀彦・尾之内 孝昭・中村 元美
ただし※印の写真は取材先から提供していただきました

本多 忠勝が築いた天守閣が3DCGで浮かび上がる

桑名城跡

【桑名市吉之丸】

色鮮やかなツツジが咲き競うころ、花の名所として親しまれる「九華公園」を散策していると、天守台跡や辰巳櫓跡などに加えて、築城に関わった関係者が家紋や家印などを石に刻んだ「刻印石」を見ることができました。実は同園は、桑名城の本丸跡と二之丸跡を整備した公園なのです。

桑名城を近世城郭へと整えたのは、本多 忠勝です。忠勝は、徳川 家康の忠臣で〝徳川四天王〟とたたえられた武将。慶長6（1601）年に初代桑名藩主になると、本丸を中心として南に二之丸、北に三之丸を配置したほか、城下町も整備。これは〝慶長の町割〟と呼ばれます。その後、5代藩主のころに全体の整備が完成。〝海道の名城〟とうたわれましたが、元禄14（1701）年に四重六階の天守閣が大火で焼失。再建されることはありませんでした。

「桑名にはお城がないといわれますが、御城印発行後は、少しずつ意識が変わってきたのを実感しています」と話すのは、桑名市観光協会の渡辺 さやかさんです。お話の御城印は、忠勝公入封420年を記念して第1版が発売され、現在は第2版と第3版が「桑名市物産観光案内所」「住吉浦休憩施設」「宿場の茶店ハジメ」で発売中です。第3版は千社札とのセット販売。第2版はスマホアプリ「桑名城探訪」と連動し、御城印を読み込むと、天守閣の3DCGが浮かぶ趣向になっています。なお「桑名城探訪」は、指定の場所でスマホをかざすと、在りし日の城や城下町の姿をVR＊やAR＊で見ることができる仕組みになっています。

今後は、「桑名へお城を見に行こう」という人が増えることでしょう。

＊VRとは、コンピューターによって創り出された仮想的空間などを現実であるかのように疑似体験できる仕組みで、〝仮想現実〟と称されます。

＊ARとは、現実の風景にデジタルな情報を付加して表示する技術のことで、〝拡張現実〟と称されます。

「柿安コミュニティパーク」内に建つ本多 忠勝像

3DCGで浮かび上がった天守閣

本多 忠勝の墨絵が描かれた御城印 第3版

ARや3DCGと連動した御城印 第2版

お問い合わせ

桑名市物産観光案内所
TEL 0594-21-5416

築城の名手、藤堂 高虎の署名と兜がモチーフの武将印も発行

伊賀上野城

【伊賀市上野丸之内】

白壁が青空に映える大天守（右側）と小天守

藤堂家の家紋（藤堂蔦）があしらわれた御城印

伊賀鉄道「上野市」駅から、伊賀上野城めざして緩やかな坂道を上っていくと、10分程度で三層の大天守と二層の小天守が姿を現します。その流麗なたたずまいから〝白鳳城〟と称される両天守は、昭和10（1935）年に完成した模擬天守。地元出身の代議士の川崎 克氏が、伊賀の文化や産業を盛んにすることを目的に復興しました。

同城の歴史を紐解くと、この模擬天守以前に、2つの天守閣が存在したことがわかります。1つ目を手掛けたのは、筒井 定次。天正13（1585）年に城主となった定次は、豊臣 秀吉の命を受け、大坂（現在の大阪）を守るための近世城郭を整え、本丸の東側に三層の天守閣を築きました。そして2つ目を築いたのが藤堂 高虎です。慶長13（1608）年に伊賀・伊勢二国の城主となった時、大坂にはまだ秀吉の息子の秀頼がいて、一触即発の状態。そこで徳川 家康は、信任厚く築城の名手でもある高虎に、大坂に対峙するための城づくりを任せたのです。高虎は、平和な時には津城、非常事態には伊賀上野城を居城にするため、同16（1611）年に大改修に着手。定次が築いた本丸を西に拡張し、高さ約30メートルの高石垣をめぐらせました。さらに、五層の天守閣を築きましたが、翌年、当地を襲った大暴風のために倒壊。その後、豊臣方が破れたため、天守閣が再建されることはありませんでした。

同城の御城印は、大天守入口の受付で購入可能です。管理運営を行う公益財団法人 伊賀文化産業協会の福田 和幸さんにお話を伺うと、「伊賀上野城」の墨字に藤堂蔦の家紋を重ねた御城印のほかに、武将印（武将の名前や花押などをデザインしたもの）があり、高虎の書状から署名と黒印（墨を用いて押印した印判）を写しとり「黒漆塗唐冠形兜」の写真を加えたとのこと。なお、「黒漆塗唐冠形兜」とは、高虎が秀吉から拝領したと伝わり、藤堂玄蕃家で所蔵していたもので、大天守1階で展示されています。城主ゆかりの兜を含む数多くの武具や調度品の中で異彩を放っていました。

御城印40枚が収納できるオリジナル御城印帳

武将印（和泉守高虎）の自筆と黒印の影印

「黒漆塗唐冠形兜」（県指定文化財）※

大天守の1階と2階は展示スペースになっていて、ほかにも絵図や解説文などで、激動の時代を自らの力と知恵で駆け抜けた高虎の姿がわかりやすく解説されています。また、本年度の企画展「どうする家康・こうする高虎！～家康を支えた高虎の仕事～」（12月24日（日）まで）では、高虎が家康や秀忠にも信任を得た経緯が、具体的なエピソードとともに紹介されていました。見どころの多い大天守は、3階からの眺望も格別。東西南北すべての窓から、山並みを望むことができました。また、天井を彩る横山 大観などが描いた大色紙46枚も見応えがありました。

1メートル四方の大色紙が彩る3階の格天井

「忍び井戸」

大天守を後にしたら、小天守内の「忍び井戸」や高石垣も必見です。前者は籠城に備えて掘ったとされる井戸で、その深さは約9メートル。抜け穴もあったと伝わります。そして後者は、高虎がめぐらせた石垣で、下を見ると足元がすくむ思いがしました。

伊賀上野城跡一帯は「上野公園」として整備されています。何度訪れても新たな発見と感動があるでしょう。

高石垣

お問い合わせ

公益財団法人 伊賀文化産業協会
TEL 0595-21-3148

※印の写真は取材先から提供していただきました

文武両道の名君・氏郷公が開いた〝豪商のまち〟

松坂城跡

【松阪市殿町】

二ノ丸下の石垣

松坂城の御城印

〝豪商のまち〟のイメージが強い松阪市ですが、本来は城下町。天正16(1588)年、戦国武将の蒲生氏郷が四五百森を拓き、城や城下の町々を築いて入府しました。古くは〝松坂〟と表記され、地名は明治22(1889)年の町制施行の際に〝松阪〟に統一されましたが、城の名は、今も〝松坂城〟です。

氏郷は、織田信長にその資質を見いだされ、千利休からは「文武二道の御大将」と賞された人物。武者隠しのあるジグザグの街路や、町の外側に寺を並べるなど、城と町を守る構えとともに、町の中央に伊勢街道を通し、出身地である近江日野などから商人を誘致し、「十楽」と呼ばれる自由な取引の制度を敷くなど商いの振興を図りました。平和な時代になってからの発展を見越したまちづくりをしたのです。

松坂開府の2年後には会津黒川へ移封となりますが、地元では名君として愛され、今も、毎年11月3日の「氏郷まつり」では、氏郷に扮した市民等が銀の『鯰尾兜』をかぶって騎馬で町を進む、武者行列が行われます。

二ノ丸から見た御城番屋敷

武者行列の氏郷公※

松坂城は、美しい曲線を描いて連なる石垣が印象的です。江戸時代には、二ノ丸から見下ろせる御城番屋敷や、市民病院がある場所なども広く三ノ丸と呼ばれ、土塁と堀に囲まれた城の域内でした。天守閣は、正保元(1644)年に大風(台風)で倒壊したといわれ、城閣の建物は現存していません。

松阪市立歴史民俗資料館(小津安二郎松阪記念館)

銀杏が多く、秋には黄色く染まる「本居宣長記念館」内※

現在は、公園として整備され、「松阪市立歴史民俗資料館」(二階に「小津安二郎松阪記念館」を併設)や「本居宣長記念館」、「鈴屋」などがあり、二ノ丸の藤棚、各所の桜、銀杏など四季折々に美しく、人々の憩いの場となっています。

またこの城跡は、大正時代の作家・梶井基次郎が大正14(1925)年に発表した『城のある町にて』の舞台とされ、月見櫓跡に記念碑があります。そこには、「今、空は悲しいまで晴れていた。そしてその下に町は甍を並べていた…」と城の上から見た風景の描写部分が彫られ、その言葉は年月を経たまちの景色への感慨を誘います。

月見櫓跡付近には売店も

松坂城の御城印は、「松坂城跡」の墨文字に蒲生家の紋章・むかい鶴が赤くレイアウトされたもので、「豪商のまち 松阪観光交流センター」(松阪市魚町)や「松阪駅観光情報センター」(松阪市京町)、松阪市立歴史民俗資料館(松阪公園内)、まつさか交流物産館(松阪市京町)で販売されています。「豪商のまち松阪 観光交流センター」には、松阪商人であった「株式会社小津商店」の小津和紙を用いた御城印や、越前和紙のものもあります。また、武人画師・こうじょう雅之さんによる「蒲生氏郷公 武将印」も人気です。

お問い合わせ

「豪商のまち松阪 観光交流センター」
TEL 0598-25-6565

「蒲生氏郷公 武将印」

「豪商のまち松阪 観光交流センター」

※印の写真は取材先から提供していただきました

戦国時代から多くの武将が居城した名城

田丸城跡

【玉城町田丸】

町を一望できる天守跡。織田 信雄が3層の天守を建てたと言われる。

田丸城の御城印

大和方面と伊勢を結ぶ「初瀬街道」、伊勢神宮と熊野三山を結ぶ「熊野街道」の分岐にあたる玉城町田丸。古くから陸上交通の要地として発達してきました。そのシンボル的な存在が田丸城です。

「ここは伊勢平野最南端の丘陵(標高約50メートル)にあたります。この地形を活かして、南北朝時代の延元元(1336)年、北畠 親房が南勢支配の拠点として山城(砦)を築いたのが田丸城のはじまりです」と玉城町教育委員会の学芸員・田中 孝佳吉さん。戦国時代には織田 信長の伊勢侵攻により、天正3(1575)年に信長の次男・信雄が田丸城に入城します。その際、田丸城を石垣や三層の天守をもつ城へと改修しました。しかしその8年後に放火により焼失。信雄は松ヶ島城(松阪市)へ移り、天正12(1584)年には北畠一族であった田丸 直昌が城主に返り咲きました。直昌が東北へ移ってからは、関ヶ原合戦で戦功を挙げた稲葉 道通が城主となり、城の再建・改築に取り組みます。江戸時代に入ると田丸は紀州藩徳川家領となり、元和5(1619)年より徳川家家老の久野氏が代々、田丸城主を務めました。明治維新を迎えると廃城令により、城門をはじめ全ての城郭建造物の解体・処分が行われました。現在は、天守台や石垣、外堀、内堀、堀切、空堀などの遺構が整備され、他所へ移築されていた「富士見門」、三の丸の奥書院なども再度移築されるなど、往時の面影を偲ぶことができます。

「城跡を歩くと、自然の地形を活かして土塁や堀を築いた中世城郭の姿と、戦国時代より発達した石垣造の近世城郭の姿の両方が見られ、城づくりの変遷が見て感じ取れますよ」と田中さん。

公益財団法人日本城郭協会によって「続日本100名城」に選定されてからは全国から年間3000人以上の人が訪れ、その美しい石垣に魅了される人も多いといいます。「石垣は積み方から造られた時代が判断できます。改修を繰り返しているので、石垣をよく観察すると、自然の石を加工せずにそのまま積み上げる最も歴史の古い野面積み、江戸末期から主流になった落し積みなど、さまざまな時代の石垣を見ることもできます」。

また城郭内にある「村山龍平記念館」の2階展示室では、城下町のジオラマや田丸城の復元模型などがあり、在りし日の姿を想像することができます。城跡では春は桜や梅、夏は大賀蓮、秋は紅葉が美しく、遊歩道を歩いて四季折々の自然を感じたり、天守跡から伊勢平野を一望したり…思い思いに散策を楽しむのもいいでしょう。

田丸城跡の御城印は、「村山龍平記念館」でもらうことができます。通常バージョン(無料)は自分で押すことができ、伊勢和紙を使用した季節の御城印(数量限定)の販売も行っています。デザインは春夏秋冬4種類あり、春は桜とメジロ、夏は蓮にトンボ、秋はカラスウリ、冬は椿などそれぞれ城郭内でみられる動植物が描かれています。

また近くには江戸時代の田丸城主・久野家の家老が建築した茶室兼別邸「玄甲舎」もあり、築170年以上の数寄屋造りがそのままに整備され見学もできるので、合わせて訪れるのもおすすめです。

お問い合わせ
玉城町教育委員会
TEL0596-58-8212

「富士見門」(江戸時代中期)

城の正面入り口にあたる本丸虎口

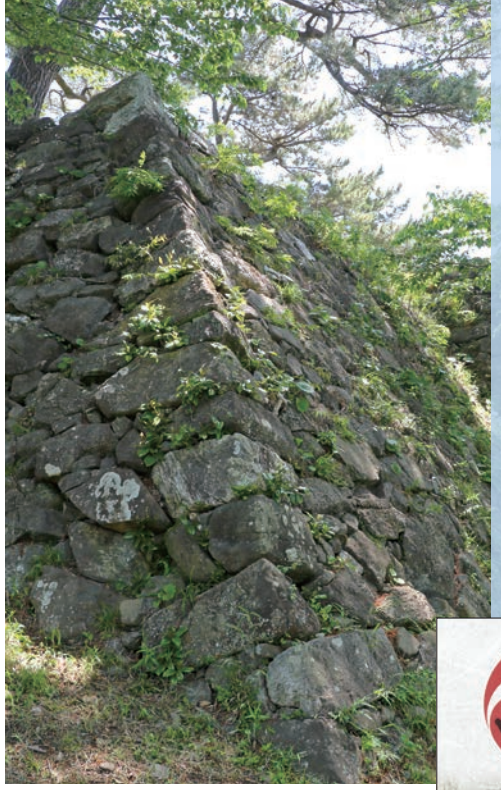
田丸城の復元模型(村山龍平記念館)

季節の御城印

大手門を海に開いた独特の城は
水軍武将・九鬼嘉隆が築城

鳥羽城跡

【鳥羽市鳥羽】



本丸西側に残る石垣

大手門が海側に突出して造られ、三方を海で囲まれた鳥羽城は、全国でも珍しい「海城」。戦国時代末期に織田 信長や豊臣 秀吉にも仕えた九鬼 嘉隆が、文禄年間（1592～1596）に築いたとされ、九鬼水軍の城として威容を誇りました。

国替えによって九鬼氏が鳥羽を離れた江戸時代初期の寛永10（1633）年には、譜代大名であった内藤 忠重により、二の丸や三の丸が造成され、近世城郭としての体裁を整えました。内藤家が3代続いた後は、江戸幕府の直轄領を経て、土井、松平、板倉、戸田（松平）と短期間に目まぐるしく城主が替わり、享保10（1725）年以降は稲垣家8代で定着。その間に鳥羽城は幾度となく災害に見舞われています。宝永4（1707）年には大地震による津波によって屋敷や櫓が流失し、石垣や城壁が大破したとされ、被害が出たことが分かっています。

嘉隆と守隆の家紋入りの御城印

「天守閣があった場所に建物などは残っていませんが、近くの海や川から運び込んだ石で詰まれた石垣の一部が本丸跡や家老屋敷跡、お堀となった相橋などに残っています。城跡からは九鬼氏、内藤氏、稲垣氏の家紋の入った瓦も採集されています」と鳥羽ガイドボランティアの会・代表の清水 久行さん。九鬼氏の城の様子は不明な点が多く、この時に天守閣も建てられていたのかなど詳しいことはわかっていませんが、本丸の石垣などは野面積みであることから、九鬼家の段階にある程度の城郭が整備されていたと考えられます。

清水 久行さん

明治の廃藩置県により、建物は〝無用の長物〟とされて取り壊され、堀は埋め立てられ、跡地には旧鳥羽小学校、旧鳥羽幼稚園、鳥羽市役所、市民文化会館が建設されました。城跡の駅側部分には、城山公園としてモニュメントなども整備され、鳥羽湾を一望できるスポットとして多くの人が訪れています。

また城跡の山側の町並みは、城があった当時の地形が概ね残されており、点在する古刹の多くは江戸時代から存在したもので、細い道が入り組み、城下町の面影が偲ばれます。

城跡に続き、清水さんに周辺の九鬼ゆかりの名所も案内してもらいました。まずは日和山のふもとの賀多神社へ。入り口の杉は樹齢400年以上の大樹で、〝九鬼の千本杉〟と呼ばれています。これは朝鮮出兵の際の日本丸を、境内の龍燈松で造ったといわれ、帰国凱旋した嘉隆は報恩のため境内に杉千本を植樹したと伝わっています。

次は九鬼家の菩提寺である常安寺へ。屋根瓦には九鬼家の家紋が記されています。本堂裏手にまわると、歴代当主の五輪塔が並び、中央に嘉隆の墓碑を配置した廟所があります。延宝年間（1673～1681）のころ、丹波の綾部城主となった隆季によって整備され、嘉隆が答志島での切腹に使ったという短刀も、寺宝として残されています。

城跡の石垣を眺め、城下町の名残を歩けば、水軍武将として活躍した嘉隆の像が浮かび上がります。鳥羽城の御城印は「鳥羽歴史文化ガイドセンター」、鳥羽市観光案内所、一般社団法人 鳥羽市観光協会で購入可能。九鬼家は嘉隆の時代に「左三つ巴」、息子の守隆は「七曜」を家紋としたため、その2つと、両方の家紋をあしらったパターンの3種類が用意されています。

お問い合わせ
一般社団法人 鳥羽市観光協会
TEL 0599-25-3019

城山公園から答志島を望む

石垣が積み上がる武家屋敷跡

三の丸跡に左三つ巴の家紋

常安寺本堂裏手に九鬼家の廟所

七曜と左三つ巴の御城印

築城名手・高虎による天空の城は
中世と近世の築城法を併用した平山城

赤木城跡

【熊野市紀和町赤木】

虎口を二重に設けた複雑な設計

赤木城の御城印

小さな盆地に位置する熊野市紀和町赤木地区。周辺は山地が連なる険しい地形で、230メートルの丘陵にある城跡が朝もやに浮かぶと、幻想的な天空の城として話題になっています。

赤木城は、築城の名人として名を馳せる藤堂高虎が築いたとされ、中世の城らしい地形の使い方でありながら、近世の城の特徴である石垣や技巧的な設計が導入された先駆的な城です。

城跡は平成元(1989)年に国の史跡に指定され、平成4年から13年かけて石垣の積み直しや遊歩道の設置などの維持整備を行い、復元作業を行ってきました。

城を象徴する石垣は、自然のままの石で積んだ野面乱層積みで反りがなく、各郭の四隅は算木積み。直方体の石の長辺と短辺を交互に積んで崩れないように強度をアップしています。「城の生命線ともいえるのが主郭の出入口。何度も折り曲げて二重の虎口を設けた複雑な設計です。また戦いのとき以外は登城の通路となるので、上段の虎口には大きな石を用いて、入ってきた敵を威圧します。最上の階段横には門柱の礎石も見つかっています」と赤木城に詳しい案内人の和田 利信さん。横矢掛かり、犬走りといった防御設備を備えていて、主郭の周囲を歩き、その構造を観察することができます。

主郭には建物跡を示す大きな礎石が至る所に残され、その北には台形型の北郭が築かれていました。「北郭のさらに北側の山林にこの城の隠れた魅力があるんです。奥には深い堀切が設けられ、攻撃に備えていたことがわかります」と和田さん。

和田 利信さん

次は段々状に設けられた西郭を歩きます。一番上の「西郭1」では2棟の建物跡、食料品を入れる室、水溜が見つかり、天目茶碗や砥石、釘が出土しています。ここから山道を少し下った山裾の平坦地に南郭が築かれ、かまど跡などから、おもに生活の場であったと考えられています。

熊野の地は、天正13(1585)年、紀伊国に侵攻してきた羽柴(豊臣)秀吉の傘下に入り、当時、畿内の城や寺社造営の木材の供給源として重要視されていました。赤木は吉野への北山街道が通り、田平子峠を越えて本宮方面へと通じる十津川街道もある拠点の地で、高虎はこの北山地方の材木奉行に任命されます。そして秀吉の弟・秀長が、北山地方での太閤検地を指令すると、耕地の少ない北山で重い年貢を課せられれば生きていけず、農民は免除を嘆願するも許されず、死滅覚悟で立ち上がります。この天正の北山一揆を鎮圧したのが高虎で、落成祝いとして農民を赤木城に呼び寄せ、一揆に参加した者を近くの田平子峠に引き立てて斬首したと伝わっています。赤木城は豊臣政権の力を象徴する城でもあったのです。

今、田平子峠刑場跡には供養碑が建立されています。新領主に対して抵抗を繰り返しながらも鎮圧されていく過程を示す、大切な遺跡となっています。

赤木城の御城印は、国道311号沿いの道の駅「熊野・板屋九郎兵衛の里」にて、季節限定と築城の名手・藤堂 高虎版を合わせて3種類販売されています。

お問い合わせ
熊野市観光公社
TEL 0597-89-2229

主郭への階段。かつては取り外し式

北郭から山へ入ると堀切がある

段々に形成された西郭の石垣

田平子刑場跡に立つ供養碑

高虎版と季節限定の御城印

木本（きのもと）探検倶楽部

熊野古道が世界遺産に登録されたことを機に、熊野市木本町の歴史や文化を勉強するための会「木本探検倶楽部」が、平成17（2005）年に発足されました。木本地区の魅力を掘り起こし、それらを伝える活動を行い、メンバーが学んだことを活かして、ガイドにも力を入れ、他地域の団体とも交流を行うなど、町の魅力発信に取り組んでいます。

代表　西 一夫さん

お問い合わせ

「木本探検倶楽部」
西 一夫さん（西書店）
熊野市井戸町653-17
TEL 0597-85-3664

商家が連なり、風情ある町並みが残る熊野市木本町は、江戸時代に紀州徳川家の本藩公領地として「奥熊野代官所」が置かれ、古くから熊野地方の中心地として栄えました。また熊野古道の松本峠や鬼ヶ城などの観光地もあり、多くの旅人が訪れています。木本町の町の魅力再発見に取り組む「木本探検倶楽部」は、埋もれている文化や歴史を掘り起こし、地域の宝を後世につなげていこうと活動しています。代表の西 一夫さんにお話を伺いました。

――結成のきっかけとなった出来事はなんでしょうか。

西…木本町の氏神さんは木本神社で、もともとは新田地区にあった「若一王子権現（にゃくいちおうじごんげん）」を、現在の地に遷したといわれています。その元宮について、地域の〝生き字引〟と呼ばれる方に教わり、訪ねたことが活動のきっかけです。深い谷に砂防や屋敷、田んぼ跡が残り、桜の大木のそばに元宮がありました。今は誰も住まない場所で、人は神にすがるしかなかったのだろうと想像できました。そんな地元である木本町の歴史や文化について、わたしたち自身があまり知らないと感じ、また当時は熊野古道が世界遺産に登録された機運もあり、およそ10人ほどが月に1度、勉強会をしようと集まりました。

――どんなテーマで勉強会を行いましたか。

西…まずは木本神社の境内に祀られている吉田大明神の石祠についてです。これは「安政の村替騒動」と呼ばれるもので、ほかに300年以上の伝統を誇る熊野大花火の歴史や整備の早かった木本町の水事情についても調べました。熊野古道松本峠付近の高田越（こうだごえ）も探索しました。松本峠は世界遺産に登録され、訪れる人も多い古道ですが、そこから外れた山の中に、田畑を獣害から守るための猪垣（ししがき）が迷路のように張り巡らされています。棚田跡や段々畑跡に、城壁のように高い石垣がひっそりと残され、大きな石が積み上げられた様子から、先人たちの苦労が伝わってきます。

――西さんが一番興味深かったのは、どんなことでしょうか。

西…鬼ヶ城西口の上の山に浅間（せんげん）神社があり、そこまでの道を整備したことがあります。天保の飢饉（きがん）の頃の話として、炊き出しを行った〝浅間粥〟というのが伝わっていて、その炊き出しは実際には代官所から出されたものだそうですが、地域には氏子たちが講の費用を捻出して救ってくれたと伝わっていて、信仰の篤さがうかがえます。今は漁業関係者の方たちがこの社を守ってくれています。

――勉強会のほか、これまでの活動を教えてください。

西…今までに得た木本町の知識を活かし、平成24（2012）年から地域内外へその魅力を発信していこうとガイドの活動を始めました。「くまの体験企画（尾鷲市）」が行うツアーで「もうひとつの松本峠」として高田越を紹介したり、ほか団体との交流も行っています。

――ガイドの特徴はどんなところでしょうか。

西…自分たちが興味のあることを話すので、偏（かたよ）りがあるかもしれませんが、熱意を持ってガイドをしています。ガイドを行う上で楽しいことは、いろんな人に出会えますし、人に伝えることで自分も勉強になります。

ここしばらくはそういった機会もなかったのですが、再び観光客も訪れていますので、そんな方に木本町で一日過ごせるようなプランや、地元向けにまちの魅力を再確認できるようなツアーを開催したいと考えています。

――「木本探検倶楽部」では、コロナ禍でもフェイスブックを通じて、町の魅力を発信していました。常に地元を愛し探究心を持って、今後も活動の幅を広げていってくれることでしょう。

インタビュー…中村 元美

松本峠付近の清掃活動※

浅間神社で整備の仲間と※

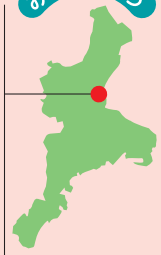
高田越を歩いて調査する※

寺の歴史をまとめた自作の資料※

木本町本町通りの福嶋邸にて※

※印の写真は取材先から提供していただきました

みえを歩こう



城下町・港町・宿場町の情趣を追って

津市 津市中心部

三重県津市は、その名の通り、昔は港町として知られたまちです。戦国時代に城が築かれ、江戸時代には藤堂藩の城下町として、また、伊勢街道の宿場町として栄えました。長い歴史の中で多彩な物語が紡がれ、今もまちのあちこちにその面影が宿ります。

今回は、津市役所をスタート地点とし、「お城公園」から津観音寺、「フェニックス通り」「津なぎさまち」「津港」と回って市役所に戻る、津の中心部を歩くコースです。

帰り道も含めると比較的長距離ですが、広い歩道のある道が多く、歩きやすい道のり。進むに連れて、官庁街から商店街、門前町、港町へと趣が変わります。津のまちが持ついろいろな顔を楽しみながら歩きましょう。

取材・文…堀口 裕世

ご案内いただいたのは「安濃津ガイド会」の高森 孝一さん。港町・城下町・宿場町などさまざまな側面から、津の歴史の面白さやまちの魅力を語っていただきました。

■ 行程図　所要時間／約3時間 ※所要時間は、おおよその目安です。

START 津市役所 → 約50m → 「お城公園」 → 約200m → 三重会館前交差点 → 約180m → 大門西交差点 → 約370m → 観音寺 → 約800m → 浄明院 → 約980m → 「津なぎさまち旅客ターミナル」 → 約400m → 津港 → 約1.7km → 津市役所

「お城公園」の高虎像に

津市役所の正門前に立つと、道を隔てすぐ前に、「お城公園」が豊かな緑を茂らせています。立派な石垣の「玉櫓跡」の脇から城内の日本庭園へ。「津城は堀が大変大きく、今は内堀の一部しか残っていませんが、昔は内堀と外堀が〝回〟の字の形になっていました。この日本庭園は西の丸と呼ばれた場所で、今は本丸と続いていますが、本来は内堀の中にあり、細い通路で結ばれていたのです」と高森さん。

本丸に進むと、ここは西洋庭園の形で整備され、藤堂 高虎の騎馬像があり、その後方に大小の天守台がそびえています。「戦国時代に織田 信長の弟・信包がこの地に城を築きました。その後、富田知信・信高父子を経て、慶長13（1608）年に高虎公が城主となって城を改修し、まちづくりをしました。高虎公は身長が190センチメートルほどもあったといわれます。津に入府したとき53歳でしたから、当時としては壮年を過ぎていたと思いますが、その後、大きな働きをされたのですから、大した人物だったのでしょう」と、思い入れのあるお話に、想像がふくらんでいきます。

東多門櫓台の「模擬三重櫓」は、昭和33（1958）年に造られ、内部は展示スペースとして活用されています。津城にも御城印があり、津駅観光案内所で販売されているとのこと。ここから「お城公園」を出て左に進みます。

観音様と門前町・大門

大きな通りに出たら右へ。この角には、発掘された内堀の石垣が保存されており、内堀の広さを実感させます。

国道23号を左に行くと、三重会館前を過ぎた辺りの歩道の左脇に、小さな地図があります。「江戸時代と現在の地図が

「お城公園」の内堀

藤堂 高虎像

津城 模擬三重櫓

保存されている内堀の石垣

「立町」の石標

重ねて標示されていますので、当時の堀の位置や大きさがよくわかります」。

大門西交差点で23号を渡り、直進。「この道は江戸時代には『立町』と呼ばれました。観音寺の参道である伊勢街道と直角に交わる〝縦の道〟という意味です」。

〝右さんぐうみち　左こうのあミだ〟と彫られた石標のある四つ角を左に曲がると**観音寺**（恵日山観音寺大宝院）です。赤い仁王門をくぐり、観音様にお参り。「ここは日本三観音の一つで、ご本尊は聖観音立像です。国府阿弥陀三尊も有名で、天照大神の本地仏とされ、昔は伊勢神宮と併せてお参りする人が多かったのです。境内にあるお地蔵さんは、高虎公由来と言われますが、この像の右肩にある傷は、第二次世界大戦のときに焼夷弾を受けたものです。空襲で津のまちは大破し、一面焼け野原で、津新町の駅からこの像が見えたといいます」と、思いをこめて語られます。

観音寺の前の道標

観音寺

観音寺境内にある地蔵像

寺町は城下町の護り

伊勢街道でもあった門前町・大門の商店街を通り「フェニックス通り」へ。「この向かい側には旧町名の『宿屋町』の石標などがあります。街道近くに80軒ほどの宿屋があったと聞いています」。往時の賑わいを思いながら右にまがり、「フェニックス通り」を歩きます。大きな街路樹がエキゾチックな景観です。「昭和42（1967）年に近鉄道路との交差点より西側が造られ、平成17（2005）年に海に続く東側も整備されました」。

しばらく歩いて交差点に出ると、交差する県道114号に沿って、左手には西来寺、上宮寺など、右手には天然寺、宝樹院など、大小の寺院が続いているのが見えます。「昔の寺町です。高虎公は、岩田川から堀川をのばして、その外側にお寺を並べて、城下の護りとしました。寺町は、川に近い藤堂家代々の墓所である寒松院まで続きます。そこから少し上流方向には、堀川の名残があります」。伽藍の屋根が連なって見えるのに心を惹かれつつも、今回はそのまま直進。また少し進むと、左手に**浄明院**があります。「ここには、藤堂家の殿様の母たちのお墓や、江戸川乱歩一家のお墓があります」。

「宿屋町」の石標

「フェニックス通り」

浄明院

江戸川乱歩の墓

爽快な海風にフェニックスが揺れる

そのまま進んで近鉄道路との交差点を過ぎると、フェニックスの葉を海風が揺らし、リゾート感が増してきます。ゆるやかな坂を登った突き当たりの堤防の向こうは海。贄崎浦です。白い砂浜と青い水平線を左に見ながら堤防沿いに歩き、**「津なぎさまち旅客ターミナル」**に出ます。海に面したデッキは爽快。中部国際空港に向かう白い船と、岬の先の四角い小さな灯台が旅情を誘う風景です。

岬を回り、灯台の脇から、岬の反対側に出ると、**津港**。こぢんまりとした港です。「昔の港は『安濃津』といって、おそらく今の阿漕浦付近にありました。日本三津に数えられるほど栄え、寺町のお寺も、多くはその近くにあったようです。しかし、地震と津波で荒廃したということで、詳しいことはわかっていません。今の港は幕末の安政6（1859）年に藤堂藩によって造られました」。

港を回り、奥の辺りから、「フェニックス通り」に戻り、スタート地点の市役所に向かいます。余裕があれば、寺町や宿屋町などをじっくり見たり、三重会館前交差点の手前にある「まんなか広場」で一休みするのもいいでしょう。

問 「津観光ガイド・ネット」（津市観光協会内）TEL 059-246-9020

「津なぎさまち旅客ターミナル」に続くデッキ

津港

2023年8月発行〈偶数月15日発行予定〉企画・編集／RON　印刷／株式会社ゴートップ　発行／百五銀行　経営企画部広報SDGs推進室
津市丸之内三―二二

守りたい、いのち

三重県指定希少野生動植物種

絶滅のおそれのある動植物種のうち、特に保護する必要がある種で、
三重県指定希少野生動植物種として指定している野生動植物を紹介します。

カワラハンミョウ

昆虫綱鞘翅目ハンミョウ科

◆ 分布 ◆
中勢、南勢

北海道、本州、四国、九州に分布する大型のハンミョウである。河原や海岸の乾燥した砂地に生息する。砂浜の衰退、河川や海岸の改修、生息地への車等の乗り入れなどにより、激減している。

資料・写真提供：三重県　農林水産部　みどり共生推進課　野生生物班

■ お問い合わせ
三重県　農林水産部　みどり共生推進課　野生生物班
TEL：059-224-2578　　メールアドレス：midori@pref.mie.lg.jp

＊三重県指定希少野生動植物種を県ホームページに準じて紹介しています。
＊県ホームページで他の野生動植物種をご覧になれます。

表紙写真　伊賀上野城（伊賀市上野丸之内）

百五銀行のホームページで、「すばらしき“みえ”」のバックナンバーをご覧いただけます。
https://www.hyakugo.co.jp/mie/

禁無断転載

百五銀行
FRONTIER BANKING

FSC www.fsc.org ミックス 紙 | 責任ある森林管理を支えています FSC® C018061